

○Materials for the distribution of lichens in Japan (9) 地衣類分布資料 (9)

○*Parmelia rampoddensis* Nyl. *Parmelia rampoddensis*, one of the commonest species of *Parmelia*, subgenus *Amphigymnia* in tropical and subtropical regions, was first reported from Japan by Hale (Misc. Bryol. Lichenol. 3: 162, 1965). Hale mentioned that he found only one Japanese specimen to be identified with this species among specimens preserved in TNS, but the locality was unfortunately not indicated. His report is apparently based on a specimen collected in Prov. Tosa, Shikoku, since it is the only Japanese specimen annotated as *P. rampoddensis* by Hale. Two other specimens collected in Kyushu are also identified with this species.

Specimens examined. Japan. Shikoku. Prov. Tosa: Kageno, Niita-mura, Takaoka-gun, I. Yoshimura 187 (TNS). Kyushu. Prov. Satsuma: Mt. Kaimon-dake, H. Kashiwadani 2087 and 7374 (TNS).

熱帯、亜熱帯に広く分布するコナマツゲゴケ (*Parmelia rampoddensis*) が日本に産することは、すでに Hale (1965) によって報告されている。本種はシリアをもち、粉芽を形成するなど形態的には日本に広く分布している ニセマツゲゴケ (*P. mellissii* Dodge) によく似ており、さらに両者ともアレクトロン酸、 α -コラトール酸を含むので、非常に混同されやすい。しかし、ニセマツゲゴケの粉芽は疎い粒状で、粉芽塊は葉縁から地衣体表面にむかってひろがったり、あるいは粉芽塊が葉縁から突出しているのが観察される。これらの粉芽塊は、葉縁または葉縁近くに形成される裂芽状の小突起から、その表面の皮層が崩れたようになって形成されたものである。これに対して、コナマツゲゴケの粉芽は粉末状で、ほとんどの場合粉芽塊は葉縁にそって枕状に形成され、その形はナミガタウメノキゴケ (*P. austrosinensis* Zahlbr.) の粉芽塊を想いおこさせるものである。今まであまり注目されていないコナマツゲゴケのもう一つの特徴として、いくつかの粉芽塊の一部分に濃黄色の色素が沈着していることをあげることができる。この色素はスカイリンで K+ 濃紫色の呈色反応が見られる。上にあげた標本のうち、開聞岳産の 2 標本ではこの特徴が認められるが、四国産のものでは色素は見られない。しかし、四国産の標本でも粉芽塊の形状は明らかに本種の特徴を示している。ちなみに、ニセマツゲゴケも熱帯・亜熱帯に広く分布し、日本ではコナマツゲゴケよりさらに北の方まで分布している。科学博物館所蔵の標本によると、太平洋側では仙台、日本海側では鳥取まで採集されているが、丹念に調査すれば、もう少し北の地域でも発見されるものと思う。

(国立科学博物館 黒川 遼 Syo KUROKAWA)